

## 映像メディアにおける登戸研究所の紹介状況

メタデータ	言語: jpn 出版者: 駿台史学会 公開日: 2017-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 花岡, 敬太郎 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/18499">http://hdl.handle.net/10291/18499</a>

【資料紹介】

## 映像メディアにおける登戸研究所の紹介状況

花岡敬太郎

はじめに

本稿では、一般のテレビ番組などで登戸研究所が直接的に取り上げられたもののうち、全国放送されたものを中心に、現在登戸研究所資料館で映像を保管できているものを紹介する。登戸研究所が一般のテレビ番組等に取り上げられる場合は、何らかの社会的な背景があり、その事から、登戸研究所の存在が戦後の日本人にどのような影響を与えてきたのかを知ることができる。同時に、扱われた作品を時系列順に並べてみることで、現在の資料館完成にいたるまで、登戸研究所が一般の人々にどのように認識されてきたのかの一端を垣間見することもできる。

「ニセ札を造れ 中国法幣廣造作戦 昭和16年」『歴史への招待』〔NHK, (1981(昭和56)年3月31日)〕

この番組は、NHKの歴史番組『歴史への招待』での特集であり、この年の8月に名古屋市内の銀行において韓国で製造されたと目される日本円の偽札が発見され、事態が国際問題にまで膨らみかねない様相をみせていたのをうけ、国家規模で偽札を製造することがどういった意味を持ってきたのかという観点から、戦時中の日本軍による偽札製造及びその流通作戦について特集している。番組は元陸軍主計大佐で登戸研究所において偽札製造に携わっていた山本憲蔵氏へのインタビューを中心に、偽札作戦の立案から登戸研究所による偽札の製造、そして実際に中国大陸でどのように流通させていったかを細かく解説しており、山本氏以外にも日本国内で製造された偽札の中国大陸への運搬に携わった元南京総司令部嘱託の板垣清氏や、実際に偽札を流通させる為に暗躍した「松機関」の元機関長である岡田芳政氏のインタビューも交え、当時の作戦展開の実情を克明に語っている。

また、偽札作戦が当初の中国経済打破から日本軍の物資調達資金確保へと目的がシフトしたこと、中国側によるインフレの助長などにより作戦がほとんど成功しなかったことなども山本氏によって語られ、更に、戦後、偽札作戦をはじめとする登戸研究所に関わる資料の多くが焼却処分されてしまったことも重ねて証言されている。

「帝銀 第4弾 何が飛び出す再審模擬裁判!! 今衝撃の証言」『11PM』（日本テレビ、1987年5月25日）

この番組は、1948年1月におきた帝銀事件の犯人として死刑判決を下された平沢貞通が、死刑執行されることなく1987年5月10日に獄中死したのをうけ、当時の人気深夜情報番組内で平沢の冤罪の可能性を探る模擬裁判を企画したものである。

同事件において平沢は冤罪の疑いが強いこと、事件で使われた毒物が青酸カリではなく青酸ニトリルである可能性が高いこと、その青酸ニトリルとは戦時中に登戸研究所で研究開発されていたことなどが番組内で詳細に言及されている。ゲストコメンテーターとして映画『帝銀事件 死刑囚』（1964年、日活）の監督を務めた熊井啓氏が出演しており、番組は検察と弁護士との法廷闘争の形をとって進められている。

弁護側の証拠物件として、登戸研究所の存在とその研究内容を当時の明治大学生田キャンパスの映像を交えながら紹介し、山本憲蔵氏も校内内の案内役として登場している。また、弁護側の証人の役どころで当時『謀略戦—ドキュメント陸軍登戸研究所—』（時事通信社、2001年に学研M文庫より再版）を出版したばかりのジャーナリストの斎藤充功氏や、帝銀事件取材していた読売新聞社会部の元記者である竹内理一氏も出演している。

番組内の一企画ではあるが、帝銀事件に関わる数多くの証言や資料を紹介し、事件の概要をかなり細かく知ることができる。そして、本編最大の特徴は伴繁雄氏のインタビューと帝銀事件当時の捜査一課第一係長である甲斐文助氏の手記（番組内では甲斐メモと呼ばれる）の紹介である。伴氏へのインタビューはこの手記をたたき台にしてインタビュアーが伴氏に事実確認をするという形をとっているが、実質的に伴氏の独演であり、戦時中登戸研究所がどのような扱いをうけ、どのような研究をし、どのような人物が出入りしていたかなどを克明に語っており、帝銀事件で使われた毒物も青酸ニトリルである可能性が高いとも言及している。また生産した毒物の治験のために中国人捕虜を人体実験に用いたことなども番組内で言及しており、そのことへの悔恨も口にしている。

伴氏が一般向けのテレビ番組に実際に出演して登戸研究所の実態について語ったのは、後にも先にもこれ1度きりであると考えられ、その意味においてもこの番組は資料的価値の高い番組である。

「信州の昭和史」〔NHK、1989（平成元）年8月14日〕

ニュース番組内の特集企画として放送されたもので、登戸研究所が戦争末期に長野県駒ヶ根市付近に疎開して活動していたこと、長野県赤穂高等学校の平和ゼミナールが放映当時研究所について調査していたことを特集報道している。

登戸研究所がどのような研究をしていたかについてのたまかな説明と、実際に高校生の調査

活動に同行して彼らの取材風景を収めたものが内容の主だが、重ねて、元所員の杉山恵一氏や、研究所疎開によって自宅を接収された人へのインタビューも独自に行っており、戦争当時の研究所が上伊那地域でどのような事をしてきたかについて触れている。

「信州の昭和史」というタイトルからもわかる通り、あくまで登戸研究所と疎開先の上伊那地方との関係に特化した特集のため、研究所が登戸にあった頃の話に関してはほとんど触れられていないが、その分、戦争が地域と密接に関わりあっていたことを重要視し、日常生活に突然入り込んできた「戦争」の一側面を視聴者に意識させる特集構成になっている。

「風船爆弾 語りつぐオレゴンの悲劇」『NNN ドキュメント 90』（日本テレビ、1990年12月9日）

この番組は日本テレビ系放映の、登戸研究所で研究開発された風船爆弾の実態についてのドキュメンタリー番組である。

この番組では、風船爆弾の製造から放球、着弾までをそれぞれ目撃者や体験者のインタビューなどから明らかにし、20世紀においてアメリカが他国から唯一受けた空襲被害という事実を縦軸に、戦争が生み出す悲劇とどう向き合っていくべきかというテーマを通底させた構成になっている。

内容としては、秘密裏に行われていた風船爆弾の放球作業を目撃した人へのインタビューから、爆弾の放球基地の様子や事故で死亡者が出ても兵器の秘密性の関係上、表立って埋葬等の供養が一切なされていないことなどが明らかにされる。陸軍小倉造兵廠に工員として勤務した当時の女学生らの証言から、製造工場での待遇が大変に厳しく非人道的であったにも関わらず、それに対して疑問を持つことすら許されなかったという極限状況下で風船爆弾が製造されていたということ、そしてアメリカで不発のまま着弾した風船爆弾に誤って触れてしまい爆発し命を落とした女性の夫であった牧師への取材から、実際にその風船爆弾が人の命を奪ったという厳然たる事実を考えさせ、戦争の持つ狂気と悲惨さを風船爆弾を巡る人々の運命から描き出している。

この番組では、兵器工廠で働いていた女性から「自分たちは戦争に青春すべてを捧げた戦争の被害者だと思っていたが、自分たちが作った爆弾で人が死んだことを知ると、そう簡単に割り切れない」という趣旨の発言を引き出しているが、これはアメリカとの戦争に対して、多くの日本人が持つ「被害者意識」と実際に自分たちが行った行為に付きまとう「加害者意識」の双方を一度に垣間見ることのできる発言であり、秘密戦という歴史の表舞台には中々出てこない事象から、戦争の素顔を引き出した番組であるといえる。

「ある卒業 日常の中に見出した平和の重み」『ニュースステーション』（テレビ朝日、1990年3月28日）

この番組は、テレビ朝日系のニュースステーションの中の一特集として放送されたもので、内容や体裁は先述の「信州の昭和史」に比較的近い。「信州の昭和史」同様、長野県赤穂高等学校平和ゼミナールによる登戸研究所の実態調査活動をまとめたもので、ゼミ生が卒業を迎えるにあたって、卒業式の時期に合わせる形で放送された。

ゼミ生へのインタビューや、顧問である木下健蔵氏へのインタビューなどが盛り込まれており、「信州の昭和史」に比べて、より生徒の調査活動の紹介に重点的を置く形になっている。

また、特集の最後では、渡辺賢二氏が平和ゼミナール生を明治大学生田キャンパスへ案内する光景も紹介されており、当時の研究所の建物がそのまま使われている場合と諸事情により研究所当時の建物が取り壊されている場合とがあることが説明され、歴史遺物の保存の難しさと重要性を示す構成にもなっている。

「僕たちはあの戦争を忘れない」『R30 特別篇』〔TBS、2008（平成20）年8月22日〕

この番組は、歴史の表舞台から抹消された戦争というテーマで3部構成になっており、その内の第1部として「杉工作」（＝偽札作戦）とその作戦の遂行主体として登戸研究所が取り上げられている。

偽札作戦にスポットを当てている点では、先述の『歴史への招待』と類似しているが、『歴史への招待』では偽札の流通や作戦推移の紹介解説に比較的重点が置かれているのに対して、こちらでは、偽札を製造することの困難さにより重点が置かれている。放送の骨子としては、渡辺賢二氏による偽札の実物の紹介と、偽札作戦の意義と実態に関する解説、そして当時登戸研究所に勤務して偽札製造に従事していた大島康弘氏へのインタビューから、偽札製造過程の実態が紹介されている。

## おわりに

今回は、登戸研究所資料館で確認できているもののうち、全国放送されたものから重要度の高いものに限定して紹介した。しかし、地方放送局の番組にも目を向ければ、実際に登戸研究所が存在している神奈川県や、研究所の疎開先である長野県を中心にいくつかの特集番組が組まれて放送されている。

紹介された番組の殆どが1980～90年にかけての放送だが、これは赤穂高校や法政第二高等学校の生徒、あるいは市民の活動によって、登戸研究所の実態が明らかになりだしたのがちょうどこの時期であること、帝銀事件の死刑囚死亡など間接的に関わりのある出来事が同時期におこった事などが要因としてあげられる。登戸研究所の名前や実態は、戦後、一般に認知され

#### 映像メディアにおける登戸研究所の紹介状況

ているとは言い難い状況ではあるが、多くの番組では、一般の人々の興味を惹くためのプログラムとして構成されており、登戸研究所が忘れ去られようとする時代の流れと、研究所の記憶をとどめようとする力の葛藤があることがうかがい知れる。また、赤穂高校や法政二高の事例は、歴史を継承し次代に語り継いでいこうとする試みでもあり、こういった事例を報道することもまた、歴史を継承する作業の一環であると言えるだろう。

また、今回は資料館開館以後のテレビ等の報道は紹介しなかったが、NHKなどを中心に、新聞や地方テレビ局などで登戸研究所資料館関連特集は随時放送されており、今後も研究動向などに合わせ、報道等は増えるものと考えられる。